

道徳教育研究会

研究テーマ

ふるさとを愛する児童生徒の育成

— 「地域教材の開発」を核とした指導方法の工夫 —



1 はじめに

「下野市学校教育計画」 2 「豊かな心」を育む教育の推進 (1)道徳教育の充実より

努力目標	努力点
① 教育活動全体を通じて行う道徳教育の充実を図る	ア 校長の方針の下、道徳教育推進教師を中心に、道徳教育の重点目標を明確にし、指導内容の重点化を図った指導に努める。 イ 全体計画や別葉及び年間指導計画を活用し、各教科等の目標と道徳教育との関連や小中一貫教育との関連を図った指導に努める。 ウ ファミリエ下野市民運動を推進し、当たり前のことを当たり前に行うことを通して道徳性を育む。 エ 道徳教育の取組を、学校だよりやHP等を通して発信し、家庭や地域の理解・協力を得るよう努める。
② 道徳教育の要としての、道徳科の授業の充実を図る。	ア 授業時数を確保し、年間指導計画等に他の教育活動との関連を明確にした上で、9年間を見通した計画的、発展的な指導に努める。 イ 児童生徒にどのような心を育てるのかを明確にし、指導方法等を工夫しながら授業改善に努める。 ウ 道徳科における評価の意義を理解し、児童生徒の成長を認め励ます評価に努める。

これまで、道徳教育研究会では、「教育活動全体を通じた道徳教育の充実」「系統性を踏まえた指導の充実」「新たな視点からの授業改善」「子ども1人1人の成長を『認め励ます』評価の工夫」等をテーマに研究を進めてきた。これらの研究や各学校の取組の成果もあり、令和元年度の全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙結果では、「学校のきまり（規則）を守っていますか」「人が困っているときは、進んで助けていますか」「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」の質問項目において、小・中学校ともに肯定的回答率が全国の平均を上回った。

一方で、地域に関する意識についての肯定的回答は全国平均に届かず、中学校区の「小中一貫の日」の部会では、児童生徒の地域に関する関心が低いことが課題として挙げられた。

これらの実態を受け、本研究会では指導方法の工夫の1つとして「地域教材の開発」をテーマに研究を進めてきた。

2 研究の内容

(令和2年度～令和3年度)

- ・教材に取り上げる題材の選定
- ・教材の素案作成

(令和4年度～令和5年度)

- ・教材の作成
- ・関連資料の作成
- ・展開例の作成と授業実践

3 研究の実践

(1) 題材の選定

発達段階や扱う内容項目、南河内・石橋・国分寺地区のバランスを考慮し、教材としての活用効果が期待される題材について検討した。

教材に取り上げた題材（令和3年度）

- 【特産物】 かんぴょう（しもつけいっぱいdayの給食献立）
- 【史跡】 薄墨桜、一里塚、下野薬師寺、
- 【施設】 大松山運動公園、グリムの館、ドナルド・マクドナルド・ハウス
- 【人物】 岩崎弥太郎

(2) 教材の作成

検討した題材を基に、発達段階に応じた教材の作成を進めた。扱う内容項目については、「国や郷土を愛する態度」のみにこだわらず、「規則の尊重」や「希望と勇気」など幅広く検討した。

【令和3年度の実施内容】

5月 研究会① ↓	・作成にあたっての留意事項の確認、題材の検討 ・地域教材作成についての講話（市道徳教育研修会：宇都宮大学 和井内先生）
8月 研究会② ↓	・資料の収集、ストーリー構成の検討 ・研究員間での協議
2月 研究会③ ↓	・素案の作成、資料収集 ・研究員間での協議、紙面での意見交換 ・素案の修正

【作成にあたり共通理解したこと】

- ・道徳科のねらいを達成することを目的とし、かつ、地域について理解を深めたり、関心をもつきっかけとなったりするものとする
- ・児童生徒が物事を多面的・多角的に考えることができるものであること
- ・特定の価値観を押し付けるものとならないこと

「特別の教科 道徳」では、児童生徒が一面的・一方的な見方に偏らず、多面的・多角的な視点から物事を捉え、考えることが求められている。作成者の思いを大切にしながらも、特定の価値観の押し付けとならないよう留意した。また、学級の実態に応じて多様な活用ができるよう、主とする内容項目を設定しつつ、教材の中に複数の内容項目が含まれるよう工夫した。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・教材を作成する過程で、教師自身が下野市の歴史や自然、特産物等について理解を深めたり、題材に関わりのある人々の思いを感じたりすることができた。
- ・作成した教材を用いて児童生徒が内容項目について考えることで、ねらいの達成と同時に地域に対する関心を高めたり、理解を深めたりすることが期待できる。

(2) 課題

- ・題材に関連する人材の協力を得るなど、指導方法の工夫についても検討していく余地がある。
- ・教材のもつメッセージが特定の見方や考え方に偏らず、児童生徒が幅広い視野で考えることができる教材となるよう、授業での実践も取り入れながら研究を進めていく必要がある。

見慣れた一里塚

私が毎朝通う中学校の通学路の途中に「小金井一里塚」という史跡がある。生まれたときから、この地区に住んでいる。だから、史跡があると分かっていたが、見慣れた場所なので、特別、気に留めたことはなかった。小学生の時に、地域探検で調べたけれど、昔のことで細かいことは忘れてしまった。史跡にある説明の看板には難しい言葉が並んでいた記憶がある。当時、先生の説明で、江戸時代の道のりの目安だということとは分かった。小学生の私にとって、その昔の何かは、たいして興味を引くものではなかったように思う。

中学校の学習で、自分の地域の文化財や史跡を調べることになった。私の町は、多くの文化財が残っていて、調べ学習をするにはもってこいの町である。

「このお寺を調べようかな。」
「たくさんあるから迷うなあ。」

友人達の話し声が聞こえてくる。私は、それほど迷わずに、小金井一里塚を調べることに決めた。決めた理由は、通学路にあって、一度調べたこともあり、近所にあるから簡単に調べられると思ったからだ。

調べてみると、一里塚というのは、一里ごとに(一里は約四キロメートル)街道を行き来する人の目印として設けられたということが分かった。車や電車のない時代、旅人たちが一里塚を目安にして長距離を歩いたそう。私は、四キロメートルごとに設けられたのなら、小金井一里塚以外にもたくさんあるはずだと思った。しかし、全国各地にあった一里塚は、道路拡張などの様々な理由で大部分が取り壊されたらしい。中には長年の雨風で、自然消滅したものもあるそう。そんな中でも小金井一里塚は保存状態が良好であることが分かった。私は少しだけ、誇らしく思った。

調べ学習は順調に進んだ。たくさん情報を詳しく調べる中で、気に留まった記述があった。「多くの一里塚は、土を盛り上げ、いくつかの木が植えられている。木を植えてあるのは、旅人が木陰で休めるようにするため」とあった。確かに、小金井一里塚にも大きな榎の木が植えられている。榎の木の姿を頭に浮かべていると、小学生の時の思い出がよみがえってきた。

ある暑い夏の日のことである。私は、かんかん照りの太陽の下、ランドセルにたくさん教科書を詰め込んで、友達と一緒に下校していた。通学路の途中で、汗びっしょりになりながら、隣で歩く友達の体調の異変に気が付いた。歩くのも苦しそうに友達を休ませようと、日陰を探して足を踏み入れたのが一里塚であった。私自身も日陰で友達と涼む中で、一里塚の榎の木のありがたさを感じたことを思い出した。思い出したのと同時に、江戸時代の旅人が同じ場所と同じように暑さをしのいでいた姿が浮かんできた。毎日通学路で行き来している見慣れた木陰に、ひと休みする旅人の姿が見えた。そして、そこには一里塚を築いた人の思いも感じられた。知らず知らずのうちに、その思いに、私も触れていたことにも気が付いた。

今では一里塚を見ると、以前とは違う思いがこみ上げてくる。調べ学習のまとめには、「この場所は昔の人の歩みや思いを残す大切なものだと思う。」と本心から書いた。調べ学習が終わった後に、改めて見た一里塚の説明の看板の最後にこう書かれていた。

現代の私たちにとっては町の歴史のシンボルであり、過去と未来を結ぶ文化財です。大切に保存しましょう。

私の心と昔の人の心が結び付いたような気がした。